

水田洋『アダム・スミス』を読む(2)

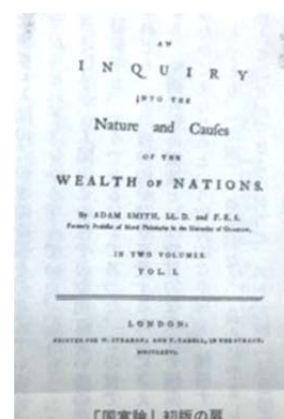
昨日 5 日、名古屋市立大学人間文化研究所のシンポジウムで報告した。退院して、なんとか報告・討論できて、ほっとしている。このシンポジウムについては、明日にレポートしたい。今朝は『アダム・スミス』の続きを書いていきたい。

本書の「おわりに」も一部紹介しよう。

「確かにスミスは、各個人が自分の生活をよくするために努力すれば、見えない手の導きによって社会全体が豊かになるといい、公共の利益を説く者を信用するなど説いた。しかし同時に、彼はそのような私的利益追求のための競争に対するブレーキが、彼のいう商業社会(あるいは文明社会)の中にビルドインされることを想定していた。

スミスが知り得なかった政策的課題、特に貧富の不平等あるいは社会的弱者への対策と、資源枯渇・環境破壊への対策(について)。産業革命の初期に生きたスミスは、当然のことながらこの 2 点についての認識は甘い。しかし彼は、社会資本の充実を私的資本の採算にゆだねておくわけにはいかないと考えたし、特に労働者階級の初等教育については、分業による人格破壊(疎外)への対策として、その必要性を強調した。したがって、彼は原則的には国家権力の公共的機能の必要性を認めていたわけだが、官僚については、ほとんど何もいっていない。救済を求める弱者の側についても、ほぼ同じである。あるいは、公平無私の官僚的合理主義とは、スミスがフェア・プレイに基づく自由競争の自律性の担い手として期待した、中立的な第三者の同感とその内面化としての良心が、巨大社会の分業体制の下で具体化された形態と言えるかも知れない。

それがどの程度、現実の社会に存在するかと言われると、憲法解釈をころころと変えていく内閣法制局長官や頻発する官僚の汚職などを見ているわれわれには、かなり疑わしいのだが、歴史の中にその片りんも見いだせないわけではない。最大の実例は、社会政策=社会保障と呼ばれる政策体系の出現である。それは社会の良心としての官僚が、自発的に作り出したのではない。社会的弱者の抵抗運動としての社会主義運動の圧力を受けて、総資本の代理人としての官僚が体制維持のためにカネで社会主義を買いとったのだ。福祉国家は様々な社会運動の圧力なしには、成立しないし存続し得ない。」



(2015年12月6日)